

氏名	フジ イ ユウ スケ 藤 井 雄 介
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第189号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉 R. Schumann 《詩人の恋 Dichterliebe》 op. 48ほか 〈論文〉 《詩人の恋》におけるシューマンの音楽語法とその実現－歌詞の 発音を中心とする演奏研究－

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	寺谷 千枝子
(副査)	〃	〃	( 〃 )	伊原 直子
( 〃 )	〃	准教授	( 〃 )	佐々木 典子
( 〃 )	〃	教授	( 〃 )	檜山 哲彦

(論文内容の要旨)

本論文は、シューマンの《詩人の恋》を対象として取り上げ、その歌詞の発音を中心とする分析と考察を通じて、作曲家の音楽語法の実現を試みるものである。

筆者自身の演奏経験や、指導の立場にある教育現場での体験の中で、声楽的な発声と歌詞の発音の間には密接な関係があると考えようになり、発音の問題を解決することが、同時に発声にも良い影響をもたらすことを実感した。また、歌詞の発音に関して同様の課題を持つ者に対し、漠然としたイメージによる説明ではなく、発声や発音技能についての具体的な言語化が必要であると考えている。さらに、我々日本人にとって外国語の歌詞を扱うということは、日本語を母国語とする者が一般には持っていない発音の感覚を必要とし、加えて歌唱する際には会話とは異なる舞台語としての発音が求められる。

そこで本論文では、ドイツ語の歌詞を持つ作品の代表的なものとして、ハインリヒ・ハイネ(1797-1856)が著した「抒情間奏曲 Lyrisches Intermezzo」の詩を使用して、ロベルト・シューマン Robert Schumann (1810-56)が1840年5月に作曲した歌曲集《詩人の恋 Dichterliebe》作品48を取り上げ、その演奏法について、主に歌詞の発音の観点から考察した。

第1章では、理想的な演奏の例を挙げ、日本人歌手の持つ問題点を指摘した。ドイツのテノール歌手フリッツ・ヴンダーリヒ Fritz Wunderlich (1930-66)を理想的な例として紹介し、彼の歌唱から受けた「母音と子音が引っ張り合っている」という印象から、理想となる「語るように歌う」演奏の形を見据え、我々日本人の持つ問題点を示した。それはすなわち、日本人が外国語を声に出す際に、カタカナや平仮名による読み方をイメージしてしまうということに加え、母音を響かせる位置が欧米の言語に比べてかなり前であるという問題であり、さらに唇の周辺をはじめとした筋肉の動きが少ないことにより、明瞭な発音を苦手とするということを指摘した。

第2章では、《詩人の恋》の詩の成立と、ハイネとシューマンの出会いを発端とする、この作品の誕生について概観した。また、シューマンがハイネの詩をどのように読み、この歌曲集を作曲したのかということについて、様々な角度から考察した。第6曲を例に挙げ、彼の日記や書簡に見られる表現や伝記的事実から、愛するものへ依存する彼の気質と「死」に対する恐れと憧れが作品に表れていることを示した。

第3章では、実際の演奏における実践法について考察した。第1章で挙げた問題を「母音」、「子音」、「音型・音域」、「言葉の意味」の4つに分類し、その解決法を見出した。それはすなわち以下のことで

ある。

- 1) 母音は口腔内の奥の、少し高い位置の一箇所に意識を持って歌うべきである。
- 2) 子音は出来る限り時間をかけて長く発音すること。また二重子音や三重子音を持つ単語は一度分解し、逆方向から発音を組み立てたり、重ねた子音の間に、弛緩した母音を挿入したりして練習することが有効である。
- 3) 音型や音域の問題に関しては、頭腔共鳴の意識を念頭に置き、特に上行音型や高音域での発声や発音については、その頭腔共鳴の意識を徐々に後ろへと移動させること。歌唱においては母音の結びつきが重要であり、子音によって母音の響きを阻害しない為にも、補助母音を活用すべきである。
- 4) 言葉の意味については、その言葉を発する前の「感情」が重要であると同時に、歌詞を表現する発音に関して、最低限の方法を知っている必要がある。

第3章ではさらに、『詩人の恋』の物語を追いながら、各曲についての分析と歌詞の発音を中心とした実践法をふまえ、我々の目指すべき演奏法を考察した。それにより、作品における「印象の単純化」と「美しさ」が重要であることを明らかにした。

また日本人が外国語の歌詞を扱うということについても、むしろ我々が外国語の歌詞の発音に関して持つ「個々の単語や発音について十分に議論できる」という、外国人ゆえの優位性を見出すことが出来た。歌詞の発音は歌唱において表現の一部であり、発音の方法を知っていれば、必ずしもその言語を流暢に話せる必要はないと考えている。

楽曲に対する理論的な考察のみに終始した従来の研究や、経験則だけに頼った演奏の実践に対し、本論文では多角的な観点から『詩人の恋』について調査、分析し、実際の演奏に向けた、作品と演奏に関する総合的な研究のあり方を示すことが出来た。

本研究を通して、ドイツ歌曲作品を演奏する際の発音について留意すべき点や、日本人歌手が陥りやすい間違い、またその解決法の一例が得られたと考える。それがドイツ歌曲のみならず、他の外国語や日本語の歌詞を持つ声楽作品を演奏する際の、ひとつの指針となることを願うものである。

#### (総合審査結果の要旨)

『詩人の恋』におけるシューマンの音楽語法とその表現」と題する本論文は副題を一歌詞の発音を中心とした演奏研究とし、ハイネの詩によるシューマン作曲の「詩人の恋 Dichterliebe」を題材に、ドイツ語発音法の視点から具体的かつ実践的に、日本人歌手にとっての問題点を解明し、理想的な発音法を追求した論文である。

第一章でドイツのテノールを観察することを通して日本人のドイツ語発音の問題点を探り、第二章で作品の成り立ちや詩人と作曲家の関わりを観ることにより第三章で詩の解釈、具体的な発音の問題点の解明が行われる。

実際の演奏や練習などを通して解明されていく問題点は、外国人なればこそ客観的に観察出来るとする自身の考えを証明する極めて説得力のある第三章である。

自身の問題として取り上げ、自身の体を通して具体化していった、自身独自の意見として手際よく読みやすい文章で述べられたすっきりとした論文と言える。

「詩人の恋」一曲一曲を詳細に丁寧に解明し、自身が歌手として何を知りたいか、何を伝えたいかが明確に記された誠実な論文として高く評価できる。

演奏会は2月14日藝大第6ホールに於いて、前半にハイネ、ケルナー、レーナウなどの詩によるロベルト・シューマンの作品7曲、後半では論文のテーマの「詩人の恋」全16曲が演奏された。

前半では声と音楽の乗り切れなかった感のある出だしではあったが、後半では声も表現も自由になり、自己の世界の広がりを感じさせる、一曲一曲の情感の流れのある演奏だった。

論文の研究に支えられた美しいドイツ語の詩による、コントロールされた、品格のある完成度の高い演奏として評価できる。

以上 論文および演奏ともに博士学位取得にふさわしいと判断する。